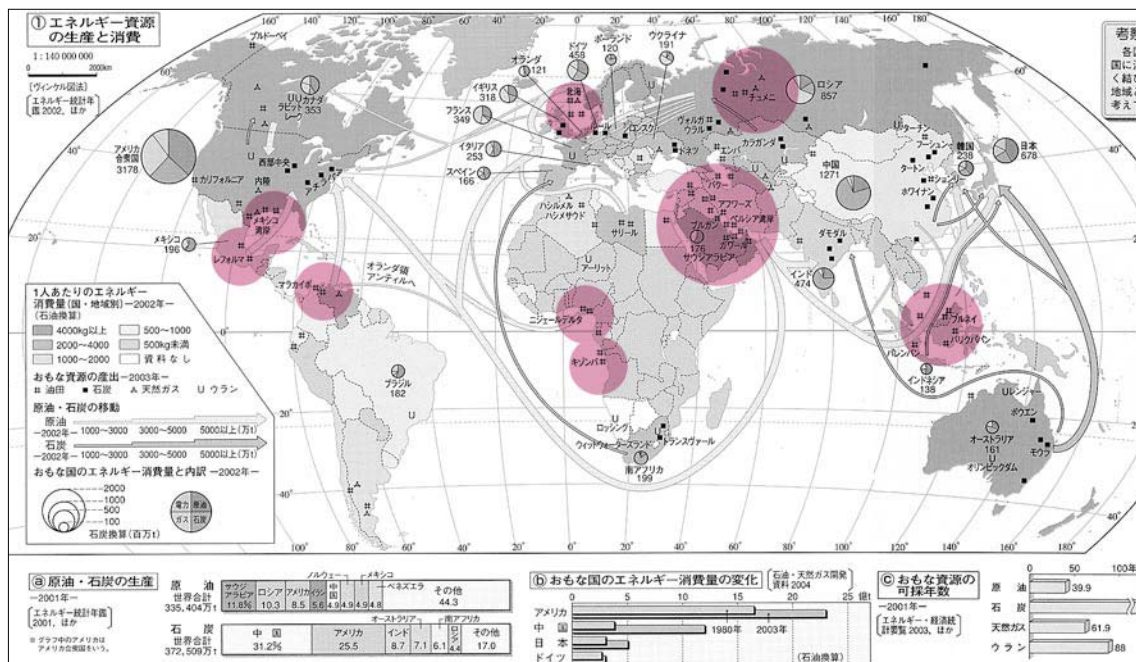
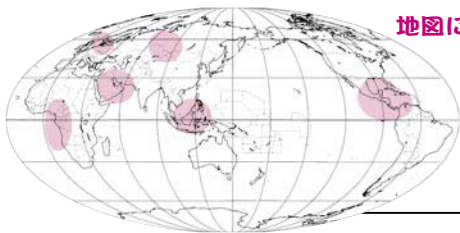


世界の石油・天然ガス地図

石油天然ガス・金属鉱物資源機構 本村 眞澄



帝国書院『新詳高等地図(初訂版)』p.115~116

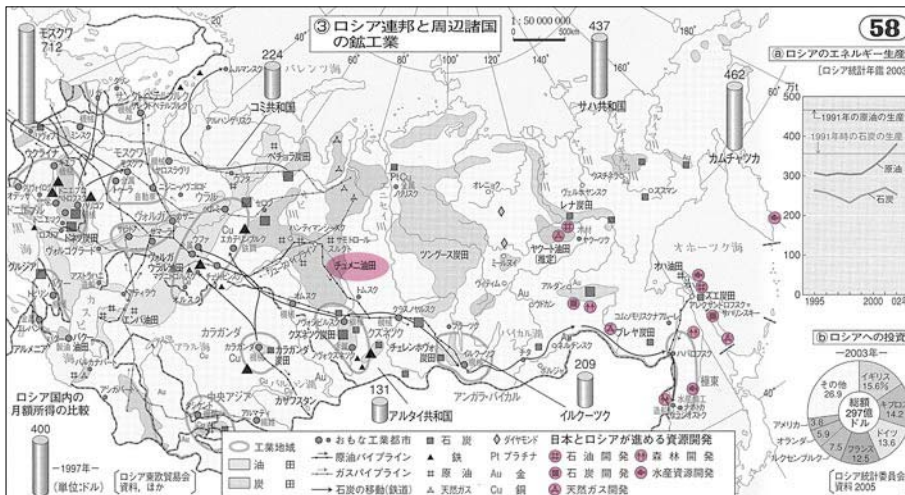
◆世界のエネルギー生産と消費

上の世界地図には、おもな石油、ガス、石炭、ウランの産地と、原油のフローが描かれている。# 桁のマークで表された油田地帯の中でも最大のはペルシア湾岸地域、すなわちサウジアラビア北東部からオマーンに、そしてイラクからイラン南部にいたる区域で、ここに世界の確認石油埋蔵量 1 兆 2,000 億バレルの約 60% が集中している (*BP 統計)。次に重要なのは旧ソ連で、チュメニ油田地帯と呼ばれている西シベリア低地中央部とカスピ海周辺域が主要産油地帯である。同統計ではこれが世界の 10% に達するとされるが、ほかの研究機関によればさらに多い 18% とする推定もある。3 番目に重要な油田地帯は西アフリカのナイジェリア、アンゴラ等である。他に、東南アジアのインドネシア・マレーシア、アメリカ・メキシコ湾岸、

マラカイボ油田地帯のあるベネズエラ等は伝統的な産油地帯であり、ほかにイギリス・ノルウェーの北海、レフォルマ油田を擁するメキシコ、ブラジルのカンポス沖合いなどの産油地帯がある。

原油の生産は、グラフ②で見るとおり、2001年の統計で、世界の 3 強はサウジアラビア(792 万バレル/日)、ロシア(690 万バレル/日)、アメリカ(570 万バレル/日)である。これにイラン、中国、ノルウェー、メキシコ、ベネズエラ等の中堅産油国が続く。ロシアは、その後も急速に生産を伸ばしてきたが、サウジアラビアも生産能力拡張を行っており、2004 年からはそれまでの能力 900 万バレル/日を 1,100 万バレル/日に引き上げるなど、世界 1 の座を維持している。

石油の消費量は、2005 年の時点でアメリカが世界の 24.5%、中国が 8.5%、日本が 6.4% で、2003 年以降、中国が日本を抜いて世界第 2 位となって



帝国書院『新詳高等地図（初訂版）』p.58

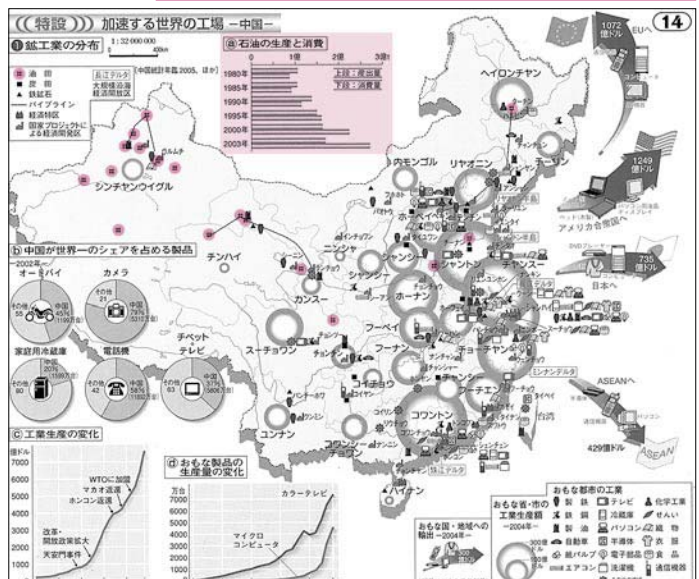
億バレルであり、サウジアラビアに次ぐ規模である。ベネズエラには可採埋蔵量2,700億バレルの超重質油があり、カナダとあわせると、将来石油の中心は西半球に移るかもしれない。高油価の状況が続く中で、アメリカのワイオミングではオイルシェール生産の試みが再開された。

る。石油の生産はソ連の崩壊後、低迷していたが、2000年より平均で年率7%というめざましい増産を達成し、サウジアラビアに次ぐ世界第2位の産油国の地位を確実なものとしている。これは、経済の回復にともなう投資の活発化と西側技術の導入が功を奏したもので、主力のチュメニ油田地帯（西シベリア）では、ロシア全体の7割の生産を維持している。ガスは世界の4分の1を生産しており、石油とガスを合わせると、ロシアは世界最大のエネルギー大国である。

◆注目されるオイルサンド・オイルシェール

北アメリカで活発な油田開発が行われているのはメキシコ湾、テキサス陸上、アラスカ、カリフォルニアの順である。カナダのエドモントンの北東には広大なオイルサンド鉱床が広がる。表土を剥がしてオイルサンドそのものを搬出し、加熱して石油を抽出する従来の鉱山方式にくわえ、蒸気を水平の井戸に送り込み、数m下に平行に掘られた井戸から生産する手法（SAGD法）が効果をあげ、主流になりつつある。この確認可採埋蔵量は1,748

◆“世界の工場” 中国は石油輸入大国



帝国書院『新詳高等地図（初訂版）』p.58

中国の主要な油田地帯は、東北地方のターチン（大慶）油田、シンチャン（新疆）ウイグルなどに分布する。グラフ②に見るとおり、石油の産出量も伸びているが、石油需要の伸びがめざましく、1993年をもって中国は石油輸入国となった。2004年の需要が620万バレル/日（年産約3億t）で、石油の自給率は約60%である。需要は、2020年には1,120万バレル/日と約倍増すると見込まれる。

注）*BP統計：British Petroleumが公表するエネルギー統計